

巣立っていった保専生たち



同じ会社で働き、同じ学校で勉強し、巣立っていった保専生たち……。
各年代の保専生4名に集まっていただき、福島製造での寮生活を振り返っていただきました。
そこには、時代が変わっても語り合える共通の話題がたくさんあります。
懐かしい思い出、かつての苦勞、流れた時間。ここにも akebono の歴史が刻まれていました。



時代の変化につれて

寮生活も変わっていくんですね。

大杉—akebonoの寮生活は、とにかく厳しかったです。自治会がしっかりしていて、懲罰委員もいました。門限にすごく厳しく、職場からの遅れもアウトでした。普段は一緒に楽しく過ごしている委員の人でも、門限時間には怖い顔して玄関に立っていて。私も仕事で1分遅れてしまって、懲罰委員会にかけられ、部屋全員で1週間の労働奉仕……。それと、外泊をするときは外泊届を提出。行き先が実家であっても、証明の印鑑をもらって帰らないといけませんでしたね。

齋藤—私のときは、提出するだけでしたよ。実家の印鑑は必要ありませんでした。だいぶゆるくなっていたみたいです。

大杉—電話もいまみたいに携帯電話がなかったので、各階にある1台の電話に並んでいましたね。寮に電話が掛かってくると「〇〇号室の〇〇さん。お電話が入っています」って呼び出しがあったんですけど、その回数が多くなってくると「あれ？あの人、彼氏ができたのかな？」ってこともありました（笑）。

齋藤—「電話をかける人は、5分以内にしてください」って言われましたよね。後ろに並んでいる人がかけられないから。

大杉—でも、後ろに並んでいるから……ねぇ？

齋藤—そうそう。話す内容が聞かれちゃう（笑）。

池田—いまでは考えられませんよ。私のときは寮の空き部屋で電話をしていました。携帯電話で。

大杉—すごい差だね……。それと洗濯機が少なかった。

宗像—洗濯機の取り合いで、仕事が終わると寮までダッシュ。「工場内を走るな！」って、よく怒られました（笑）。

大杉—寮に着くと、すでに使われている。そうすると「次は誰。その次は誰」「じゃあ、その次をお願いします」って、まるで伝言ゲームでした。

齋藤—私たちは、黒板に自分の名前を書いていました。

大杉—知恵が付いたんだね（笑）。

齋藤—部屋に冷蔵庫とかテレビは？

池田—ありましたよ。テレビは、3年生が用意することになっていて。

齋藤—私のときは、冷蔵庫が各階に1台ずつあって、入れる物に名前を書いていました。

宗像—私は、ちょうど部屋に1台ずつ冷蔵庫を入れてもらった年でしたね。



大杉ますみさん(旧姓：三浦)

在籍期間：1977年4月～1980年3月

卒業して、もう35年経ちましたね。卒業後は、ずっと保育士の仕事を続けています。最近、昔受け持った生徒の子どもが入園して「孫みたいだな」と思いながら仕事をしています(笑)。



齋藤美恵子さん(旧姓：松川)

在籍期間：1987年4月～1990年3月

卒業してから25年間、福島市内で保育士をしています。昔の卒園児が保育の教育実習に来る年代になっているので、もう少しで親子2代を受け持てるかなと楽しみにしています。



宗像尚美さん(旧姓：角田)

在籍期間：1993年4月～1996年3月

卒業後は医療事務の仕事をしていたのですが、いまは福島県船引町の幼稚園で仕事をしています。自分の子どもも同じ幼稚園に入園して、親子ともどもにお世話になりました(笑)。



池田道子さん

在籍期間：2003年4月～2006年3月

保育士になって8年が経ちました。現在は、福島市内の保育園で働いています。

保専生制度とは(元々は保育士を目指す専門学校生育成制度のこと)

当社で行っている勤労学生制度。1965年に曙文化学園が羽生に開校し、中学校を卒業後に入社した社員が通学していました。1971年、福島製造所が福島女子短期大学と提携し、現在の保専生制度が開始。この制度を利用している学生は、

保専生として昼間は工場で働き、夕方から福島学院大学 短期大学部 保育科 第二部で勉強をしています。akebonoの勤労学生制度を利用し、卒業した学生は、これまでに3,000人を超えています。

宗像—昔は、和室にこたつがありましたよね。テレビも
談話室とか食堂にあって。

齋藤—みんなでお菓子を持って談話室に集まったり。

大杉—それから、誕生日などがあるたびに「曙サラダ」
をつくってお祝いしましたね。

齋藤—曙サラダってどんなものでしたっけ？

宗像—スパゲティサラダですよね？

大杉—え？ 私の時代は、食堂のお盆にアルミを敷いて、
レタスを敷いて、ソーセージとか季節の果物を並
べて、マヨネーズをかけたものでした。

齋藤—私のときは、スパゲティサラダを「曙サラダ」っ
て呼んでいましたよ。

宗像—あとは、ビスケットケーキですよね。

池田—「曙ケーキ」ですよね？ 牛乳に浸したビスケッ
トを並べて、クリームとフルーツでデコレーショ
ンするんですよ。

大杉—ケーキはありませんでした。時代は変化していま
すね。私のころは、消灯もしっかり当番が回って
ましたが、消灯当番はいまありますか？

池田—はい。あります。22時55分に仕事が終わるので、
消灯は24時ごろでしたね。

宗像—私のころより勤務時間が延びているみたい……。
そうすると、「魔水[※]」は、いまのほうがもっとき
つくなっただけでしょうね。冬になると、仕事が終
わる時間に星が出ているじゃないですか。次の日、
早番で外に出ると、まだその星が出ていて。それ
は、いまでもいい思い出というか。一番つらかつ
た思い出ですね。

akebono でいい大人に出会えたことに とても感謝しています。

池田—私がつらかったことは、職場が暑かったことでは
ね。熱プレスじゃなくて本当に良かった（笑）。
でも、仕事の内容が好きだったので、楽しかった
です。

大杉—私は、臭いかな。体や髪に臭いが染み付きました
からね。

齋藤—臭いは、昔もいまも同じかな。

大杉—そこは変わってないですね。「akebono だ！」っ
ていう臭い。

齋藤—「仕事やらなくちゃ！」っていう臭い。

大杉—さっきここに上がってきたとき「ああ、懐かし
い」って思いました（笑）。不思議なことにあの
臭いでさえ、感慨深いものになるんですね。

齋藤—私は、寮の自治会長をやっていて、人をまとめる
ことが難しく、つらく感じたこともありました。
そのとき、職場の班長に「やりたくてもできない
人もいるんだから、自分に与えられたことを一生
懸命やりなさい」と言われてから、すべてプラス
思考になりました。「これを乗り越えれば、いい
ことがある」とか「全部自分のためになっている」
という考えになりましたね。





大杉—私も、子どもから大人に成長する時期に、いい大人に出会えたことにとても感謝しています。私たちは3年間で卒業だけど、ずっとここで働いている人たちは何年も何回も私たち寮生を温かく迎え入れて、育てて、見送ってくれる。本当にakebonoは、会社自体が温かいですね。

宗像—職場の班長がお父さんのような存在でしたね。恥ずかしい話、早番で寝過ごしちゃったことがあって……。慌てて行ったら、班長に「コラー！」って怒鳴られて。でも、それがすごく温かくて、いまだに怒鳴り声が耳に残っています（笑）。

寮祭の練習で仲間割れ。 でも大変だったことが、一番の思い出です。

大杉—当時は、もっと時間がほしかったですね。

齋藤—本当に、時間が足りなかったですね。

大杉—寝る時間もほしかったなあ。テレビを見ることがほとんどなかったから、あのころの歌などは全然記憶にない。

宗像—「空白の3年間」（笑）。

池田—じっとしている時間がなかったですね。

大杉—休みの日も会社の行事や学校の行事、寮の行事があって、本当にプライベートはありませんでしたね。当時は狭い部屋に4人が入って、ひとりにな

れるのはベッドの中だけでした。

池田—卒業したあとの生活からは考えられないほど、とにかく誰かと一緒にいる時間が長かったですね。毎日、友だちや先輩、後輩と一緒にだったことが楽しかったです。それに、あのときは大変だったけれど、友だちと会うといつも「あのころに戻りたいね」って話になります。

大杉—大変だったことが、いまではいい思い出になっていますね。苦しいことと楽しいことが表裏一体というか。

宗像—新入生歓迎会や寮祭に向けて、出し物の練習をしているときに仲間割れとかをしてね。でも、みんなでひとつのものをつくり上げて発表するという機会は、卒業後はなかなかありませんからね。

齋藤—akebonoは、人との関わりが濃いよね。

宗像—そうですね。会えなくても連絡を取り合って、特別な友だちになりましたね。

大杉—本当にいい仲間巡りに出会ったと思います。忙しくてあまり会えませんが、この前久しぶりに会ったら、一気に10代の顔に戻っちゃいました。この会社に勤めさせていただいたから、そういう想いのできるのかなって思いますね。

※魔水：「魔の水曜日」のこと。水曜日が遅番で木曜日が早番だったため、水曜日のことを「魔水」と呼んでいました。

※2008年10月対談